

「大河」第14号

令和8年3月13日

『対話』について考える

以前、劇作家の平田オリザ氏の【対話のレッスン】という本を読みました。

この本には、－日本人のためのコミュニケーション術－というサブタイトルがつけられており、『会話』と『対話』の違いについても分かりやすく書かれています。

平田氏によれば、『会話』とは「お互いの事情をよく知った者同士の気楽で気軽なおしゃべり」であるのに対して、『対話』とは「お互いのことをあまりよく知らない者同士が“知らない”ということを前提にして行う意識的なコミュニケーション」であるということです。

日本ではこれまで何百年にもわたって、極端に人口流動性が低い社会が形成されてきました。こうした狭い閉じた社会の中では、『対話』の必要性はあまりなく、「なんとなくわかる」という日本人の合意形成能力が大きな力を発揮してきたと言われます。

こうした「わかり合う文化」を日本は独自の文化として築いてきたといえるでしょう。

しかし、これからは日本社会でもますます「多様性」と「協働性」が重視される時代になります。つまり、『対話』重視の社会への転換が求められるのです。異なる価値観や考え方を擦り合わせ、相手との違いを認め合い、それを発展させることが必要だと考えます。

さらに平田氏は、日本はこれまで企業や学校といった大きな共同体に従属する単層的な社会であったがゆえに、単一的な価値観に縛られやすい面があったと言います。しかしこれからは一人の人間が趣味やボランティア、社会貢献活動など異なる価値観をもった複数の集団に所属する重層的な社会に舵を切ることで、新たな価値の創造に向かうことになります。

学校教育でも、今までは学級や学年などの限られた集団の中での交流が主であったと考えます。しかし、小学生や中学生の子どもたちによる地域の異年齢・異世代の方との交流や学校間の交流、さらにボランティア活動や地域サークルの活動などでの横断的な交流の場を増やすことで、対話的なコミュニケーションをより深めることができると考えています。

そして、このことが地域社会における豊かな結び付きや地域の活性化につながっていくことも大いに期待できるのではないのでしょうか。

参考図書:「対話のレッスン(平田オリザ)」講談社学術文庫